

## 社会正義に焦点を当てた日本映画で異文化理解能力を教える方法とは How to Teach Intercultural Competency with Japanese Films Focusing on Social Justice

福田真樹子, テキサス大学サンアントニオ校  
Makiko Fukuda, The University of Texas at San Antonio

### 1. はじめに

既存の文化学習というのは、伝統行事、食べ物、生活習慣やしきたりなどの文化について学びその知識を学ぶというものにとどまっていた。これからの文化学習というのは、その知識を土台とし、グローバル社会でリーダーシップをとるための人間力、すなわち自分が育った文化圏以外でも、異文化内で適切な行動を取り、異文化で暮らす人たちの行動を正しく解釈する能力を身に着けるといふ目的を持って良いのではないのでしょうか。そのために本研究では、文化教育を異文化知識の習得だけでなく、自己文化の認識、異文化に暮らす人々への共感力、異文化への好奇心、異文化に対するオープンマインドを育てるために、外国語教師として何を教えていくべきかに焦点を当て、社会正義をテーマにした日本映画を使った異文化理解能力向上のための教授法を提案したいと思います。

#### 1.1 異文化理解能力の定義と指標

Hammer, Bennett & Wiseman は、異文化理解能力とは異文化間で起こる出来事を適切に捉え、異文化内で適切な行動を取る能力だと述べています (Hammer, Bennett & Wiseman 2003, p.422)。 Association of American Colleges and Universities は異文化理解能力の向上を測る指標として Intercultural Knowledge and Competence VALUE rubric を提案しました。この IKC VALUE Rubric は、3つのカテゴリー（知識、能力、態度）に分かれた6つの側面から、生徒の異文化理解能力を測るために使われます。具体的には、自己文化の認識と文化的世界観に関する知識から知識的側面を測り、共感力と言語・非言語コミュニケーション能力を測定する事で能力的側面を測り、好奇心、オープンマインドから態度的側面を測ります。

自己文化の認識とは、自己文化に存在する規則や偏見がなぜ生まれたのかを認識できているかどうかを測る指標です。自己文化の認識ができると、学習者自身が考え方や視点を変えることが出来るようになります。次に文化的世界観の知識というのは、その文化に根付く独特の世界観、例えば、歴史、価値観、コミュニケーションスタイル、政治、経済、信念や慣習等に対しての知識が備わっているかどうかを測る指標です。そして、共感力では、異文化体験を自己文化と複数の文化的世界観で解釈し、異文化圏の人々の気持ちを理解し協力的に振る舞うことができる能力を測ります。言語・非言語コミュニケーション能力では、異文化間の違い、例えば距離感や表現方法の違い等を理解し、その理解に基づいて、相互理解に向けた円滑なコミュニケーションが取れる能力を測ります。さらに、好奇心は他の文化について深淵な興味を示し、興味を持ったトピックに対して複数の文化的視点を反映させて考えようとする姿勢、オープンマインドは、文化的に異なる人々と積極的にコミュニケーションを取り、友好的な関係を築き、そして非難的な言動を控えることが出来るかどうかを測る指標です。

## 1.2 映画と変形学習

ここでは映画のクラスのタスクを考案する際に参考にした変形学習について説明し、さらに、社会正義をテーマにした映画を選んだ理由を説明します。Mezirow が述べる変形学習プロセスとは、学習者が海外で新しい生活を始める時に遭遇する問題、挑戦、混乱する出来事などの苦境から生じる学びのプロセスだと言っています(1991)。このプロセスでは、苦境を経験することで、自分自身に備わった知識、信念や経験について再評価する事が可能となり、それによって新しい考え方や視点を身につけることが出来ると言われていています。そして、海外研修中や留学中に起こった変形学習によって、効果的に異文化理解能力を伸ばす事ができると実証した研究は数多くあります(Kelin & Wikan, 2019; Trilokekar & Kukar, 2011; Stahl, et al., 2020)。しかし、コロナ禍で留学が出来なくなった学生や留学資金が用意できない学生に対しても、異文化理解能力を伸ばす機会が提供できるように、本研究では、映画を使用して学習者の変形学習を促そうと試みました。変形学習で最も大切なことは、学習者が何らかの苦境を経験することです。しかし海外生活での苦境は学生それぞれによって異なり、誰もが同じ苦境を経験するという保証がない為、学習者の変形学習に大きな差が出てしまいます。そのような理由から、実際に苦境を経験させるのではなく、社会正義がテーマの映画を選び、主人公の苦境を映画で鑑賞させる事を通して、学習者の変形学習を促しました。筆者は、社会正義がテーマの映画は、学習者自身の気がつかない偏見を顕にし、新しい視点を身につけさせることに適していると考え、さらにそういった映画は日本の社会主義に関する知識の習得だけでなく、共感力、好奇心、オープンマインドという異文化理解能力の向上にも効果的な教材になるのではないかと考えたのです。

## 1.3 映画とタスク

2021年春学期の日本映画のクラスでは、7つの映画をテーマごとに選びました。「アイヌモシリ」では人権問題・アイヌ民族差別・同化政策、「おくりびと」では、職業偏見・日本人の宗教観、「そして父になる」では、職業偏見・日本人の血筋に対するこだわり、「あん」では、ハンセン病患者や、刑期を終えて出所した犯罪者への偏見、「もののけ姫」では、女性の社会進出・ハンセン病患者に対する宮崎駿のメッセージ、「彼らが本気で編むときは」では、LGBTQ、そして「ハーフ」では、人種差別や在日問題と、トピックごとに描かれる差別や偏見が分かりやすい映画を選びました。そして、学習者にはそれぞれの映画に対し、次の5つのタスクをこなさせました。

まず1番目のタスクでは、カルチャーショックを与えるような短い場面を映画から選び、その場面で何が起きているのか説明させました。例えば「おくりびと」では、死人を清めている場面を見て、何をしているのか解釈をさせました。この場面は、日本人の死に対する扱い方や葬式の知識がなければ、全く意味不明の行動として見えます。実際に学生の回答には、「この場面では、彼は女性を治すために儀式か何かをしているようです。」「この人は魔法使いですか。観客の前で、彼は意識不明の女性を毛布で覆いました。そして、彼女に何かを拭きまし

た。」など様々な答えが出ました。日本文化に対する知識無しでは意味不明なこの状況をどのように理解したかを認識する事は、学生自身の潜在意識を知る事にもつながります。例えば「儀式か何かをしていた」と答えた学生は、このような儀式的な場面をどこかで見たことがある、「魔法使い」と答えた学生は、意識不明の人に対して他人が何かをする時は魔法的なものが関連しているという知識が身についていたという事になります。

2番目と3番目のタスクのためには、日本文化に根付いた社会正義の問題やその歴史についての解説をする講義ビデオと映画の内容に関する質問群を作成しました。社会正義の問題に対する歴史的背景、政府の取り組みや現在の社会状況を紹介する事は、学習者自身の国での同じような社会正義の問題と比較するきっかけ作りにもなりました。例えば、ハンセン病患者に対する隔離政策が産んだ偏見や差別問題を知る事は、新しい病気であるコロナの患者や患者の家族に対してどのような偏見や差別がうまれる可能性があるか考えるきっかけとなりました。

4番目のタスクはグループディスカッションで、クラスメートと課題について話し合う機会を与えました。このグループディスカッションは、学生同士が映画に描かれた問題についての情報を交換したり、一般的な疑問を話し合ったりする機会にもなりました。印象的な例として、日本で生活している LGBTQ の人々の権利の少なさと、政府主導の改革が遅れている事など、この問題については比較的先進国であるといえるアメリカの学生にとっては、憤りを感じる事が多いというのがディスカッションから伝わってきました。

5番目の振り返りのタスクでは、映画を鑑賞する前と鑑賞した後で自分の考えがどう変わったのかを振り返らせ、また、同じような問題が自分に起こった場合（同じように他者から不当に扱われた時）の解決法について考えさせたりしました。例えば、映画「HAFU」での振り返りでは、”What kind of cultural conflicts/struggles do you think you will experience in Japan if you stay there for a long time? Describe one possible scenario incorporating your position as “non-Japanese” and your solution to solve the conflict.” や、映画「もののけ姫」では “Demonstrate your knowledge of three different perspectives and their missions of *San*, *Eboshi*, and *Ashitaka*. Because of these differences, their fights were inevitable. If you were the fourth additional character in Princess Mononoke, how would you solve the conflict differently and avoid the death of the Deer God?” という質問に答えを書かせました。

5つのタスクを通して、講義ビデオを見た後には内容に関する10問の小テスト、映画を見ながら答える質問群は10問、グループディスカッションの後には5問の質問、自分自身の振り返りのために5問の質問を用意し、各所で生徒が自分の知識を見直す機会を与えながら、1つの映画鑑賞に2週間の授業時間を充てました。

この5つのタスクの中でも特に重要な鍵となるのはスニークピークの場面選択です。このタスクの目的は、自己文化に存在する規則や偏見がなぜ生まれたのかを認識させ、潜在意識を知ることです。その為、文化的世界観が反映している場面や日本文化の知識がなければ解釈不可能な場面を選択し、前知識が無い状態で学生に場面解釈をさせます。学習者は理解不能な場面に遭遇した際に、自分がどのような反応をするかを認識する事によって、自分に備わった偏見や、無意識に

行ってしまう差別的行動に気づき、将来的に異文化圏に暮らす人々の行動に対して誤解する事を防いだり、自分と立場が異なる相手と交流する際に、相手の立場から物事を見ようとしたりする考えを身に着ける事ができるのではないのでしょうか。特に社会正義の問題は、自身の偏見や差別が反映されやすいトピックであるので、判断を下す前に自身の否定的な感情をコントロールし、日本人の問題に対する対処の仕方や態度を客観的に観察することが可能になります。さらに、理解不能な場面を選ぶことで、学習者間の場面解釈が多様になり、グループディスカッションで同じ場面を見ていても自分とは異なる解釈があることを学ぶ事が可能となります。意見の違う人同士で、お互いがなぜそのような解釈をしたのか、そして正しい解釈は何だったのかなど話し合いが促進され、異文化理解能力の指標の自己文化の認識と文化的世界観の知識を育むことができます。

## 2. アンケート結果

IKC Rubric を反映した以下の質問を作成し、学生にリッカート尺度で学期末に自己評価させました。その中の5つは異文化理解能力に関する質問でした。

1. I expanded my knowledge about Japanese social justice by taking this class. (IKC Rubric, 文化的世界観の知識)
2. Seven films related to social justice in Japan increased my interest in learning (or continuing learning) the Japanese language.
3. This class has given me a new perspective to understand the world.
4. I learned how to think from other people's perspectives and be more empathetic now than before. (IKC Rubric, 共感力)
5. I learned to be more open-minded and less judgmental about what I used to consider strange. (IKC Rubric, オープンマインド)
6. I am more interested in issues of social justice now than before taking this class. (IKC Rubric, 好奇心)
7. This class helped me realize my own cultural bias, prejudice, or stereotyping toward certain people and things. (IKC Rubric, 自己文化の認識)

アンケートの結果、異文化理解能力の指標のうち最も自己評価が高かったのは、文化的世界観の知識に関する1番の質問でした。それに続き、共感力、オープンマインド、好奇心、自己文化の認識に関してもほとんどの学生が高い自己評価をしていました。残りの質問は、社会正義の学習と日本語学習の動機の関連性を問うものでしたが、興味深かったのは、社会正義を学ぶことが日本語学習の動機づけに効果的であるということでした。社会正義というトピックは日本の否定的な部分を見せることなので、この質問に関しては学生の自己評価が低くなると想定しましたが、予想とは全く逆の結果になったので、引き続き社会正義を授業で取り入れていきたいと思いました。このリッカート尺度の質問の他にも、4つの記述式の質問も作成しました。その1つである「このクラスで学んだ一番大切なことはなんでしたか」という質問に対しては、「判断を下す前に相手の文化や視点を考慮すべきだ」という意見や、「日本で不当に扱われている人たちの経験を通して、自分は人を見かけで判断しないことを学んだ」という趣旨の意見が多数ありました。

### 3. 結論

このクラスは社会正義をテーマにした7つの映画を使用して5つのタスクをこなすことで、学習者の異文化理解能力を育成することを目的にしました。学生の答えを読む作業と、筆者がIKC Rubricに基づいた能力を伸ばすための質問を作るという作業を通し、以下のような改善点を見つけました。

まず、今回の質問作りにはRoell (2010)が提案した質問をいくつか参考にしましたが、共感力を育成するには、関連付け(Relate to)させるのではなく、主人公の人生を語らせる(Narrate)方が効果的であるということを知りました。Roellが提案した質問では、“Are there any characters that you can relate to. If so, who and why?”というように、関連付けという言葉を使用しています。しかし、関連付けをさせると、自身の経験から相手の苦境を理解する傾向があることが明らかになりました。共感力とは自分以外の視点から物事を理解し共感する能力であるため、主人公の人生を語らせるという練習をすることで、苦しんでいる登場人物の視点から物事を捉えることができ、共感できる力を伸ばすことが出来るのではないかと思います。

文化的世界観の知識や自己文化の認識では知識や気づきを導く質問作りが大切ですが、オープンマインドを育成する1つの方法としては、学生の表現の仕方やニュアンスを注意深く読み、批判的な表現(crazy, dislike, strange, etc.)に対して、どう言い直すべきかを指導するだけでも効果があったように感じました。そして、好奇心を育成する方法としては、映画のトピックに関して他に知りたいことを見つけ、リサーチをさせて、答えを書かせる作業をさせましたが、社会正義の映画をみるという作業だけでも学生の好奇心はずいぶん高まったのではないかと思います。さらにこのクラスは日本語学習者とそうでない学習者が履修できるクラスになっていた為、言語指導には焦点を置いていませんでしたが、IKC Rubricの指標「言語・非言語コミュニケーション能力」を伸ばす為にCOIL(Collaborative Online International Learning)を導入し、日本人の学生とグループディスカッションさせる機会を作り非言語コミュニケーションの違いについて話し合う機会があればいいとも思いました。今後も変わりゆく社会情勢を注意深く観察し、社会正義がどのように変化していくのかを学生と共に学び、学生の異文化理解能力の育成のために力を注いでいきたいと思います。

### 参考文献

- Bennett, J. M. (2008). Transformative training: Designing programs for culture learning. *Contemporary leadership and intercultural competence: Understanding and utilizing cultural diversity to build successful organizations*, 95-110.
- Hammer, M. R., Bennett, M. J., & Wiseman, R. (2003). Measuring intercultural sensitivity: The intercultural development inventory. *International journal of intercultural relations*, 27(4), 421-443.
- Hunter, A. (2008). Transformative learning in international education. *Developing intercultural competence and transformation: Theory, research, and application in international education*, 92, 107.

- Klein, J., & Wikan, G. (2019). Teacher education and international practice programmes: Reflections on transformative learning and global citizenship. *Teaching and Teacher Education*, 79, 93-100.
- Mezirow, J. (1997). Transformative learning: Theory to practice. *New directions for adult and continuing education*, 1997(74), 5-12.
- Roell, C. (2010). Intercultural Training with Films. In *English Teaching Forum* (Vol. 48, No. 2, pp. 2-15). US Department of State. Bureau of Educational and Cultural Affairs, Office of English Language Programs, SA-5, 2200 C Street NW 4th Floor, Washington, DC 20037.
- Stahl, G., Brock, C. H., Young, J., Caldwell, D., Sharplin, E., & Boyd, F. B. (2020). Dispositions towards diversity: two pre-service teachers' experiences of living and teaching in a remote indigenous community. *Pedagogy, Culture & Society*, 28(4), 525-542.
- Trilokekar, R. D., & Kukar, P. (2011). Disorienting experiences during study abroad: Reflections of pre-service teacher candidates. *Teaching and Teacher Education*, 27(7), 1141-1150.